

# 高等学校におけるキャリア・カウンセリング

## - 援助方法についての - 考察 -

山口県立防府商業高等学校 教諭 久原 弘

### 1 研究の意図

「キャリア教育の推進について」(山口県教育委員会2005)では、「今日、経済状況や雇用形態が変化していく中で、若者自身の職業や働くことに対する意識の希薄さ、いわゆるフリーターやニートの増加、高水準で推移する就職後の早期離職等、若者の進路をめぐる課題が一層深刻化している」<sup>(注1)</sup>と指摘されている。高等学校では、自分の生き方について考える機会を与え、生徒に主体的、自主的な進路選択を促すような援助を行うキャリア・カウンセリングが必要となってきた。筆者が平成14年度から16年度までに行った教育相談活動(相談件数720件)においても、生き方や進路にかかわる相談が約半数を占めていた。当初はそうしたキャリア・カウンセリングにも、来談者中心カウンセリングを生かした面接のみで対応していたが、相談者が自己実現に至るまでに時間がかかりすぎると感じていた。そのため、そうしたキャリア・カウンセリングにおいては、教師(支援者)と生徒(相談者)とのラポール(信頼関係)形成のための来談者中心カウンセリングを生かした面接に、相談者が自己開示をしやすいように支援者も積極的に自己開示を行う面接を組み合わせて行ってきた。この面接方法は、礎となる来談者中心カウンセリングを生かした面接と、支援者が積極的に自己開示を行う「ジョハリの窓」の考え方を取り入れた面接とを組み合わせた援助方法であると考えることができる。

本研究では、こうした援助方法の有効性を明らかにするために、2つの事例を取り上げ、相談者の変容過程を3期(ラポール形成期、自立準備期、終結期)に分けて、各段階における援助方法について考察を行うこととした。なお、研究を進めるに当たり山口県教育研修所における「平成18年度小・中・高 人間関係づくりに生かす教育相談研修講座」を参考にした。

### 2 研究の内容

#### (1) キャリア・カウンセリングの定義

「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」(文部科学省2004)には、「キャリア・カウンセリングとは、子どもたち一人一人の生き方や進路、教科・科目等の選択に関する悩みや迷いなどを受け止め、自己の可能性や適性についての自覚を深めさせたり、適切な情報を提供したりしながら、子どもたちが自らの意思と責任で進路を選択することができるようにするための、個別またはグループ別に行う指導援助である」<sup>(注2)</sup>と定義されている。

#### (2) 本研究におけるキャリア・カウンセリングの流れ

この定義を踏まえ、本研究では、次のようにキャリア・カウンセリングを実施した。ラポール形成期には、傾聴を中心とする来談者中心カウンセリングを生かした面接を実施し、自立準備期には、自立に向けて自己開示や自己発見が一層促進されるよう、来談者中心カウンセリングを礎としながらジョハリの窓の考え方を取り入れた面接を実施する。具体的には、支援者が相談者を受容するだけでなく、お互いが相手をどのように見ているかを教え合う等、支援者も積極的に自己開示を行う。終結期には、自らの意思による進路の選択に向け、進路を明確にす

るための面接を実施する。

### (3) 本研究における援助方法

生徒が進路について悩み、相談に来た場合、教師（支援者）はとかく生徒（相談者）に対し、過去の生徒の例に当てはめたり、一方的に教師の意見を話したりしがちである。筆者にも、そうした経験があるが、生徒にとっては、自分の意見を主張しにくかったであろうと反省している。教師がすべきことは、生徒がどんな気持ちで、何を考え、何を望んでいるのかを理解し、生徒が安心して自分の可能性にチャレンジできるようになるための援助であろう。その援助とは、生徒の伝えたいことや話の内容を聞き取り、生徒の気持ちをしっかり支えることであり、そのためにはまず生徒とのラポールを形成しなくてはならない。

ラポールを形成するための方法の1つに、来談者中心カウンセリングがある。それは、傾聴を旨とすることによってラポールを形成し、さらに相談者自身の心の中にある自己実現に向かおうとする力を引き出そうとする援助方法である。来談者中心カウンセリングにおいては、自己実現により、自ずと進路の問題も自力で解決できるとされているが、ラポールは形成できても自己実現までにはかなりの時間を要することが多々あるという指摘もある。

高等学校におけるキャリア・カウンセリングの場合、入学から卒業までという定められた期間を意識する必要がある。最上級生になって来談者中心カウンセリングによるキャリア・カウンセリングを受けた生徒の場合には、高校卒業までに自己実現に至らないこともある。そこで筆者は、ラポール形成の後に相談者が自己開示をしやすいように支援者が自ら積極的に自己開示を行う面接を行ってきた。この援助方法は来談者中心カウンセリングを礎として、支援者が積極的に自己開示を行う「ジョハリの窓」の考え方を取り入れた面接である。

本研究では、支援者が自己開示をほとんど行わない来談者中心カウンセリングを生かした面接と、積極的に自己開示を行うジョハリの窓の考え方を生かした面接を組み合わせた援助方法を用いた。以下に、その援助方法における主要な要素である来談者中心カウンセリングとジョハリの窓について説明し、ジョハリの窓の考え方を生かした面接の方法について述べる。

#### ア 来談者中心カウンセリングとジョハリの窓

##### (ア) 来談者中心カウンセリング

来談者中心カウンセリングは、Carl Rogers によって唱えられたカウンセリングの理論及び立場であり、「すべての人間は、自分自身の中に、個人的にも満ち足りた、社会的にも建設的な方向に、自らの人生を導いていく能力をもっている。ある特定のタイプの援助関係の中で、私たちは、その人間が自由に自らの内面の智恵と自信を発見していくように援助することができる。その人びとは、ますます健康で、ますます建設的な選択をするようになるであろう」<sup>(注3)</sup>という考えに基づいている。この考えでは、援助者としてのカウンセラーに求められる3つの条件として、無条件の肯定的配慮（相談者がどんなことを訴えてもあるがままに受け止めること）、共感的理解（相談者が表明している感情や思い等、相手の内面的なものに耳を傾けること）、自己一致（カウンセラーがその相談者との関係の中で、ありのままに純粋であること）を挙げている。

実際の面接では、相談者の言葉に耳を傾け、相談者の言葉を繰り返したり、相談者が言わんとするところをより適切な言葉で言い換えたりしながら、相談者を受容していくことが大切である。

来談者中心カウンセリングを生かした面接を行う理由は、傾聴することによってラポール

が形成されると考えるからである。ラポールが形成されて初めて、相談者は援助者に対して自己開示を行い、さらに自らの課題を解決する方向へと向かうと考えられる。したがって、キャリア・カウンセリングにおいても、ラポールの形成が援助の第一歩であると考え、来談者中心カウンセリングをキャリア・カウンセリングに生かすこととした。

#### (1) ジョハリの窓

ジョハリの窓(図1)は、対人関係における個人の領域を図解したもので、提唱者である Joseph Luft と Harry Ingham の2人の名前から「Johari(ジョハリ)の窓」と呼ばれている。左上の「開放」の領域は、自分にも他人にも分かっている自分であり、相互のコミュニケーションがスムーズになり、相互理解も深まる領域である。左下の「秘密」の領域は、自分は知っているが、他人は知らない自分である。人は秘密を意識的に隠そうとするものであるが、相互理解を深めるためには、必要な部分は知らせる必要がある。右上の「盲点」の領域は、自分には分からないのに他人には分かっている自分であり、他人との間にずれを生じる原因となりやすい領域である。右下の「未知」の領域は、自分にも他人にも分からない、あるいは意識していない無意識の自分である。

	自分に分かっている自分	自分に分からない自分
他人に分かっている自分	開放	盲点
他人に分からない自分	秘密	未知

図1 ジョハリの窓

ジョハリの窓の考え方を生かした面接を通して、相談者は自己開示やフィードバック(自分には分かっている自分の能力等を知らせてもらうこと)を経験し、「開放」の領域が広がり、コミュニケーションがとりやすくなると同時に「盲点」の領域や「秘密」の領域が狭くなり、それまで「未知」の領域にあった、自分には気付かずにいた能力や才能を発見する可能性が大きくなると考えられる(図2)。

その発見によって相談者自らが、自分の生き方に気付き、自らの意思と責任で進路を選択することにつながると考え、ジョハリの窓の考え方を生かした面接を行うこととした。

開放	フィードバック →	盲点
自己開示 ↓	発見	
秘密		未知

図2 未知の領域における発見

#### イ ジョハリの窓の考え方を生かした面接の方法

筆者は「平成18年度小・中・高 人間関係づくりに生かす教育相談研修講座」で用いられたカード(注4)をキャリア・カウンセリングに応用できると考え、それらのカードに一部修正を加えて、以下の手順に従って実施した。なお例として、筆者に関するカードを示す。

互いに「名前」、「子どものころの様子」、「学校」、「好きなこと」について、「私を知らせるメモ」(次ページ図3)に記入し、内容を相手に伝える(自己開示)。

互いに相手のイメージをいくつか挙げ、「イメージの鏡」(次ページ図4)に記入して、それを交換し、そのように思った理由を相手に伝える(フィードバック)。

互いに「イメージの鏡」をじっくり眺め、「当たっていること、そうだろうなと思うこと」と「はずれていること、そうじゃないのになと思うこと」について振り返り、「イメージの振り返りメモ」(図5)に記入し、その内容を相手に伝える。

私を知らせるメモ
私の名前は... 久原弘です
私の子どもころは... とても無口でした
私の学校は... 海の近くにあって、浜風が いつも強く吹いていました
私の好きなことは... ・ 童話を創作すること ・ 昆虫採集

図3 私を知らせるメモ(例)

イメージの鏡 - 他人に映った私 -
・ おもしろい
・ 虫が好き
・ 社交的
・ おしゃべり
・ 自然を愛した探検家

図4 イメージの鏡(例)

イメージの振り返りメモ
当たっていること、そうだろ うなと思うこと(理由) 自然を愛した探検家 (虫が好きだから)
はずれていること、そうじゃ ないのになと思うこと(理由) 社交的 (自分としては内向的であ ると思っているから)

図5 イメージの振り返りメモ(例)

#### (4) 実践事例

ア 事例1 - やりたいことが見つからなかったAさんが、販売業を選択した事例 -

(ア) 第1期：ラポール形成期(X年6月：初回面接～第2回面接)

来談者中心カウンセリングを生かした面接を実施した。その面接の中からAさんと筆者による主だった会話を以下に紹介する。

Aさん：もう3年なのに何もしてなくて落ち着かないんです。

筆者：もう3年なのに何もしてなくて焦っているんですね。

Aさん：やりたいことが見つからないんです。

筆者：やりたいことが見つからなくて困っているんですね。

Aさん：父が単身赴任で、かなり遠隔地の勤務になったんですよ。ポッカリ穴が空いたよう  
です。

筆者：お父さんが単身赴任で寂しいんですね。

Aさん：母親が病気がちで元気がないんです。

筆者：お母さんの元気がなくて心配なんですね。

Aさんは当初沈黙していたが、筆者は沈黙を自ら破ることをせず、Aさんの発する言葉に耳を傾け、繰り返しを行ったり、Aさんの言わんとすることをより適切な言葉で言い換えた

りした。そのうちにAさんは明るくなり、主に家族の話をし始め、将来の展望が見えず焦っていることも分かった。

(1) 第2期：自立準備期（X年7月：第3回面接～第6回面接）

Aさんについての3枚のカードを用いながら、来談者中心カウンセリングを礎として、ジョハリの窓の考え方を生かした面接を実施した。以下にその3枚のカードと、Aさんと筆者による主だった会話を紹介する。

私を知らせるメモ

私の名前は...  
父が徹夜で考えてくれた

私の子どもころは...  
毎日遊んでばかり

私の学校は...  
自然に恵まれて環境が良いところ

私の好きなことは...  
・ 人といること  
・ 自転車をこぎながら景色を見ること

図6 私を知らせるメモ

イメージの鏡  
- 他人に映った私 -

- ・ 温厚
- ・ 辛抱強い
- ・ おしとやか
- ・ 笑顔が素敵
- ・ 自然が好き
- ・ スポーツが得意

図7 イメージの鏡

イメージの振り返りメモ

当たっていること、そうだろうなと思うこと（理由）  
笑顔が素敵  
（初めは意外に思ったが、人と接していると楽しいので、つい笑顔になっているから）

はずれていること、そうじゃないのと思うこと（理由）  
おしとやか  
（家族に対してよく怒っているから）

図8 イメージの振り返りメモ

筆者：人と話している時の笑顔がとても素敵ですね。

Aさん：自分ではそんなことを今まで思ったこともなかったんですが、もしかしたら人と話すのが好きなのかもしれません。

筆者：話す時のAさんはいつもにこやかでうれしそうですよ。

Aさん：そうですか。そういえば私は人と接している時、楽しい気がします。そうすると、私だけじゃなくて人にも楽しい思いをしてもらいたいですね。

まず、Aさんは「私を知らせるメモ」(図6)から「人といるのが好きなこと」を筆者に話した(自己開示)。次に筆者のフィードバックによる「イメージの鏡」(図7)から「笑顔が素敵である」といった自分のイメージに気付いた。さらに「イメージの振り返りメモ」(図8)から、それまで未知の領域にあった「人と接することを楽しむ自分」を発見した。

こうしてAさんは、それまで意識することのなかった「人と接することを楽しむ自分」に気付いたことにより、「人にも楽しい思いをしてもらいたい」と話すようになった。また筆者が3枚のカードを提示し、それらを用いた面接の説明をすると、Aさんはすぐに興味を示し、面接が進むにつれ筆者との会話も弾み、生き生きとしてきた。

(ウ) 第3期：終結期（X年7月～8月：第7回面接～第8回面接）

進路を明確にするための面接を行った。その面接におけるAさんと筆者による主だった会話を以下に紹介する。

筆者：例えば人に楽しい思いをしてもらおうとはどんなことですかね。

Aさん：そうですね。人をもてなして相手に喜んでもらえることでしょうか。そんな生き方をしてみたいですね。

筆者：なるほど。でも、もてなすといってもいろいろありますが、具体的にどんなものを考えているのですか。

Aさん：心を込めてお客さんと応対することでしょうか。そうすれば喜ばれるし。となるとやはり販売かなと思います。

筆者は、Aさんの第2期での「人にも楽しい思いをしてもらいたい」という言葉を受けて、「例えばそれはどんなこと」と質問した。それに対してAさんは、「人をもてなして相手に喜んでもらえるような生き方をしたい」と答えた。筆者はAさんの考えを受け止め、「具体的にそれはどんなもの（仕事）ですか」と質問し、それがどのようなものであるかを考えさせた。それに対してAさんは、「自分に最もふさわしいのは、心を込めてお客さんと応対することで喜んでもらえる仕事である」と答えた。このようにAさんは進路に対する自分の考えを徐々に明確にすることによって、将来の仕事として「販売業」を選択した。

イ 事例2 - 無気力となり進路を決められなかったBさんが、公務員を選択した事例 -

(ア) 第1期：ラポール形成期（X年6月：初回面接～第2回面接）

Aさんと同様に来談者中心カウンセリングを生かした面接を実施した。その面接の中からBさんと筆者による主だった会話を以下に紹介する。

Bさん：それにしても最近A球団の調子がよくないですね。

筆者：A球団の調子が悪くて気になるのですね。

Bさん：やる気が出なくてぼんやりしていることが多いんです。

筆者：やる気が出なくてぼんやりしてしまうんですね。

Bさん：聞いてくださいよ。私が大切にしているパソコンを無理やり母親に取り上げられたんですよ。

筆者：そうですか。お母さんにパソコンを取り上げられてしまって、とても困っているんですね。

Bさん：母親がどんな時でも弟ばかりひいきするんですよ。

筆者：なるほど。お母さんがどんな時でも、弟さんばかりをひいきするので腹を立てているんですね。

Bさんは、表情が硬く落ち着きもなかったが、筆者は野球等の世間話に耳を傾け、繰り返しを行い、Bさんの言いたかったことをより適切な言葉で言い換えた。そのうちにBさんの表情が次第にほぐれ、母親に対する不満をまくし立てるように一気に話したことから、人に自分の気持ちを聞いてほしかったことが分かった。

(イ) 第2期：自立準備期（X年7月：第3回面接～第6回面接）

Bさんについての3枚のカードを用いながら、来談者中心カウンセリングを礎として、ジョハリの窓の考え方を生かした面接を実施した。以下にその3枚のカードとBさんと筆者による主だった会話を紹介する。

私を知らせるメモ

私の名前は...

父の1字をもらった

私の子どもころは...

引っ込み思案だった

私の学校は...

中学生の時に生徒会役員を  
していた

私の好きなことは...

- ・時事問題が好き
- ・パソコンが好き
- ・大人と話すこと

図9 私を知らせるメモ

イメージの鏡  
- 他人に映った私 -

- ・温厚
- ・パソコンが得意
- ・ニュースに詳しい
- ・話し好き
- ・人の世話が好き
- ・スポーツが好き

図10 イメージの鏡

イメージの振り返りメモ

当たっていること、そうだろうなと思うこと(理由)

人の世話が好き  
(すっかり記憶が薄れていたけれど、生徒会の時、みんなのために一生懸命世話をしていたから)

はずれていること、そうじゃないのと思うこと(理由)

スポーツ好き  
(すぐ疲れるし、興味がないから)

図11 イメージの振り返りメモ

筆者：中学校の時は、生徒会で活動していたんですね。すごいですね。

Bさん：ええ。でも今思うと、どうして中学の時は、生徒会であんなに頑張っていたのか不思議です。

筆者：生徒会の活動といえはなかなか大変だと思うんですが、Bさんは世話好きな感じがしますものね。

Bさん：記憶が薄れていたけれど学校では生徒会でみんなのためによく世話をしていたように思います。

筆者：なるほど。今でもそうなんですか。

Bさん：そう言われてみると、忘れてしまっていたけれど、今でもそんな気持ちが残っているのかもしれない。

筆者：学校のためというか、みんなのために頑張る、そんな生き方っていいですね。

Bさん：そうですね。なんか学校のためというか、みんなのために頑張るのが好きだったのかもしれない。

まず、Bさんは「私を知らせるメモ」(図9)から「中学生の時に生徒会役員をしていたこと」を筆者に話した(自己開示)。次に筆者のフィードバックによる「イメージの鏡」(図10)から「人の世話が好き」といった自分のイメージに気付いた。さらに「イメージの振り返りメモ」(図11)から、それまであまり意識していなかった「生徒会役員だった時、みんなのために一生懸命世話をしていた自分」を発見した。

こうしてBさんは、それまで意識することのなかった「中学生の時に生徒会で活躍していたこと」を思い出して、「学校のためというか、みんなのために頑張るのが好きだった自分」を再認識した。また、筆者が3枚のカードを提示し、それらを用いた面接の説明をすると、Bさんもすぐに興味を示し、面接が進むにつれ表情が更に明るくなり、活気が感じられた。

(ウ) 第3期：終結期（X年7月～8月：第7回面接～第8回面接）

Aさんと同様に進路を明確にするための面接を行った。その面接の中から主だった会話を以下に紹介する。

筆者：前は生徒会でみんなのために頑張る生き方がいいですね、といった話をしたのですが、具体的には生徒会ではどんな活動をしたのですか。

Bさん：もちろん文化祭、体育祭では中心となって活動したのですが、例えば町おこしみたいな、学校だけでなく町の人みんなのためになる活動もしました。

筆者：なるほど、町おこしみたいな活動ですか。そんなみんなのためになるような生き方っていいですね。

Bさん：ええ、そのときは地域の方たちに感謝され、自分が人のために役に立っているんだと初めて実感できて、とてもうれしかったですね。そんなみんなのためというか、人のためになる生き方をしてみたいですね。

筆者：それは、とてもいい経験をしましたね。そうすると、人のためになる生き方ってどんなものがあるのでしょうか。

Bさん：そうですね。例えば、私が町おこしでやったような活動は市民のためになる仕事といえるかもしれません。そうすると市役所とかの公務員ですかね。

筆者は、Bさんの第2期での「生徒会でみんなのために頑張るのが好きだった」という言葉を受けて、「生徒会ではどんな活動をしたのですか」と質問した。それに対してBさんは、町おこしのような、みんなのためになるような活動をし、そのことによって、地域の人たちに感謝されたことから人のためになる生き方がしたいと話すようになった。筆者はBさんの考えを受け止め、「具体的にそれはどんな生き方ですか」と質問し、それがどのようなものであるかを考えさせた。それに対してBさんは、「町おこしでやったような市民のためになる生き方（仕事）」と答えた。このようにBさんは進路に対する自分の考えを徐々に明確にすることによって、将来の仕事として「市役所等の公務員」を選択した。

ウ 考察

第1期のラポール形成期では、傾聴を中心とした来談者中心カウンセリングを生かした面接により、Aさん、Bさんは、ともに筆者と次第に打ち解け、世間話を始め、さらに心の内面にあった家族に対する思い等を話し始めた。このことから、ラポールが形成されたと考える。第2期の自立準備期では、来談者中心カウンセリングを礎としながらジョハリの窓の考え方を取り入れた面接の中でAさん、Bさんは、ともに自己開示と支援者からのフィードバックにより、それまで意識していなかった自分を発見した。その結果、2人とも自己の可能性や適性についての自覚が深まり、自分の生き方を展望することができるようになったと考えられる。第3期の終結期では、Aさん、Bさんは、ともに進路を明確にするための面接により、生き方や進路に関する自己の考えを具体化することができた。その結果、自らの意思で自分に最もふさわしいと思われる進路を選択することができたと考えられる。

本研究におけるジョハリの窓の考え方を生かした面接では、自己開示と他者からのフィードバックが重要であり、支援者も自己開示を行っている。これに自己開示をほとんど行わない来談者中心カウンセリングを生かした面接を組み合わせるのであるから、本研究における援助方法は矛盾を含んでいる組合せのように考えられる。

しかし、本研究の結果から、来談者中心カウンセリングによって形成されたラポールは、第2

期以降の自己発見と進路の明確化に至る過程において大きな効果を発揮したと考えられる。それは第1期（ラポール形成期）においてラポールが形成されていたため、第2期（自立準備期）に実施した、3枚のイメージカードを使っての面接も和やかな雰囲気で行ったことに表れていた。この面接では、それまで傾聴に徹していた支援者が、積極的に自己開示を始めたことによって、相談者は支援者の自己開示やフィードバックを好意的にとらえながら、新たな自分を発見することができたと考える。第3期（終結期）においても、支援者からの質問に対して真剣に答える姿勢には、支援者を信頼し、支援者からの質問に答えることで、自らの進路を明確にしようとする意欲が表れていた。

本研究では、相談者が自己理解を深め、新たな自分を発見したことが進路の選択につながったと考える。すなわち、ジョハリの窓において、「開放」の領域が拡大するにつれ、「盲点」と「秘密」の領域が縮小し、「未知」の領域に、それまで意識をしていなかった自分を発見した。その発見が、Aさんにとっては、「心を込めて客と対応することで喜んでもらえる」という点からの販売業へ、またBさんにとっては、「人のためになる生き方」としての公務員へとつながっていったのである。

### 3 まとめと今後の課題

本研究では、支援者がほとんど自己開示を行わない来談者中心カウンセリングを生かした面接を礎として、支援者が積極的に自己開示を行うジョハリの窓の考え方を取り入れた面接を組み合わせ、その上にそれらを下地として、進路を明確にするための面接を実施した（図12）。その結果、支援者と相談者とのラポールの形成と相談者の自己発見が一層促進され、意欲が高まり、進路を選択することができた。したがって、矛盾を含んでいるこの組合せが有効な援助方法であったと考えられる。

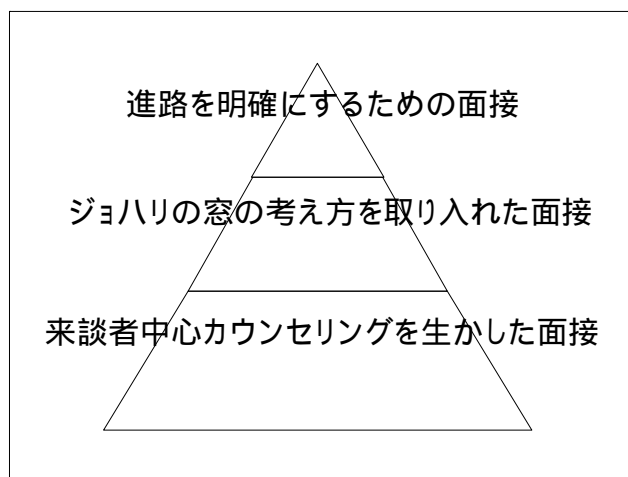


図12 本研究における援助方法

「すべての不適応の背景には進路の問題がある」<sup>(注5)</sup>といわれているように、自分の生き方を見つめ、自らの意志と責任で進路を選択することは、自己実現に至る必須の因子の1つである。

今後は、本研究における援助方法に基づいたキャリア・カウンセリングを積み重ねることで、この援助方法の妥当性を高めるとともに、他にどのような援助方法が有効であるかについても更に研究を進めたい。

---

#### 【引用文献】

(注1) 山口県教育委員会、『キャリア教育の推進について～児童生徒一人ひとりの夢の実現に向けて～』、2005

(注2) 文部科学省、『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～』、2004

(注3) H.カーシェンバウム/V.L.ヘンダーソン編、『ロジャーズ選集(上)』、誠信書房、2004

(注4) 吉田道雄、「平成18年度小・中・高 人間関係づくりに生かす教育相談研修講座」、講義資料

(注5) 三川俊樹、「平成18年度小・中・高 一人ひとりへの対応に生かす教育相談研修講座」、講義資料

#### 【参考文献】

- 山口県教育委員会 『キャリア教育の推進について～児童生徒一人ひとりの夢の実現に向けて～』 2005
- 津村俊充・山口真人編 『人間関係トレーニング第2版』 ナカニシヤ出版 2005
- 柳井修 『キャリア発達論青年期のキャリア形成と進路指導の展開』 ナカニシヤ出版 2005
- 松木邦裕 『私説 対象関係論的心理療法入門 精神分析的アプローチのすすめ』 金剛出版 2005
- 国分康孝 『教師の使えるカウンセリング』 金子書房 2000
- 三村隆男 『キャリア教育入門 その理論と実践のために』 実業之日本社 2004
- 横山哲夫 『事例 キャリア・カウンセリング 「個」の人材開発実践ガイド』 生産性出版 1999
- 河合隼雄 『カウンセリング入門』 創元社 2004
- 鐘幹八郎・名島潤慈 『心理臨床家の手引き』 誠信書房 2003
- 上地安昭 『教師カウンセラー 教育に活かすカウンセリングの理論と実践』 金子書房 2005
- 宮本美沙子 『やる気の心理学』 創元社 1981
- 小山充道 『学校における思春期・青年期の心理面接』 金剛出版 2002